宇治 市政だより

障害者福祉都市・特集

発行　宇治市
編集　文書広報課
京都府宇治市宇治琵琶33番地
電話　22－3141

愛とふれあいの地域社会を

障害者の問題をみんなのものに

昭和五十六年から国際障害者年が始まり、障害者の「完全参加と平等」の実現に向けて、各分野で取り組まれてきました。

市でも、「福祉の町づくりのための環境整備要綱」を定めるなど、障害者が積極的に社会へ参加できる条件整備につとめてきました。しかし、まだまだ不十分なのが現状です。そこで、市では、五十七年度と五十八年度の二カ年、「障害者福祉都市」の指定を受け、環境改善を始めとする諸事業を一層進めています。

今、私たちが住む社会は、健常者だけで成り立っているのではありません。子どもや老人、障害を持つ人などすべての人で成り立っています。地域で生活をしている障害者の姿を通して、市民の皆さんに障害者の問題を考えていただきたいと思います。（写真は、自立にむけて身体障害者職業訓練校で頑張る浅野義衛君、二十三歳）

共に生きる社会

宇治市が国から、五十七年度と五十八年度の二カ年、「障害者福祉都市」の指定を受けたことは大変意義があります。

市内で障害を持つ人は、二千八百人になり、交通事故や労働災害など身近に起きる出来事を思うと、決して他人事ではありません。障害者問題は、障害を持つ人を含めて、すべての人が平等であるという共通の基盤に立ち、自分に何ができるかを問い、自ら行動することこそが最も大切であると思います。

障害者福祉都市の町づくりは、道路や公共施設などの生活環境を改善するとともに障害の有無にかかわらず地域で共に育ち、共に学び、共に生きることができる社会を作っていくことと考えます。

市では、今後ともより一層の努力をしていきますので、市民の皆さんのご理解とご協力を心からお願いします。

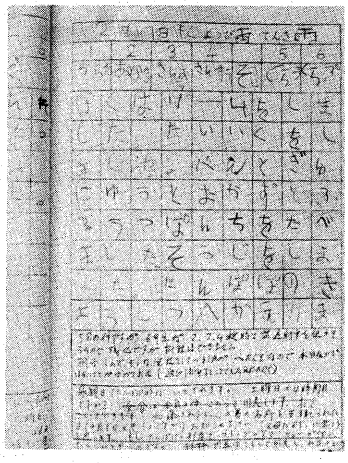
宇治市長　出本弘大

ヒデ君からの連絡帳

地域の仲間とともにガンバル

英君は10歳になりました

小倉町西山、南小倉小学校を見下ろせる高台にある松田さんのお宅を訪ね、ダウン症の松田英之君が成長してきた過程や、今、地域や学校で精いっぱい生きぬいているようすをお母さんに語っていただきました。お母さんは「英之は、良い先生にもめぐり会えたし、友だちもたくさん出来たし、校区の学校にも行っています。だから私の話が『障害児』をもつ親の気持を代表するものでは決してないし、英之を通して保育や教育や地域での問題を言いつくせるものとは思いませんが…」と話されました。「英之は恵まれてきた」というお母さんの言葉は逆にもっと困難な問題をかかえた親や、障害児、障害者の存在を鋭く提起した言葉であったように思われるのです。



英君が書いた連絡帳

障害があっても今までと変わりなく

松田英之君。愛称英君は昭和四十七年九月十一日生まれの十歳。南小倉小学校の障害児学級の四年生だ。

英君は三歳の時に、府立医大病院でダウン症と診断された。首のすわりや発語・初歩が少しずつ遅れていたが初めての子供を育てる母親には「障害」について知る由もなかった。出生時の体重二千七百五十㌘、妊娠中も出産時も異常なくごく普通の分娩だった。

一歳児健診の時、「発育が少し遅いが別に異常はない」と言われたが、二歳半を過ぎたころから、お母さんは、英君の発達が遅れているのが気になりだした。軽い気持で家庭児童相談を訪れ、ケースワーカーからダウンの疑いがあるのでと府立医大病院を紹介された。

「ダウン症です」。「？」医師からうして育てたら一番いいのかを考えなくてはと思いました」。

人に感謝する心を知った

半年後の四月、京都市にある母子通園施設「どんぐり教室」に通いはじめた。英君三歳、妹一歳の時だった。

「どんぐり教室」へは、月、水、金の週三回通った。槇島から小倉駅まで自転車の前と後に子供を乗せ、満員電車で京都駅へ。またバスに乗って四十分もかかった。

お母さんは妹を抱え、妹のミルクやおしめの入った大きなカバンを持っているので両手をふさがれ英君と手をつなぐこともできない。しかし、迷子にでもなられてはと、「スカートをもちなさい」と言いながら人ごみの中を歩いた。英君が満員電車はイヤヤとダダをこね乗らないと言ったことも。でも一度許すと今までの苦労は水のあわ。親も子も泣きながら無理やり乗せ「お兄ちゃんやからガンバロウ」と英君をはげました。家に帰るとクタクタになった。くつをぬぎながら「〝もう、いやや〟と何度も思い泣いたけど、また一日が過ぎると、〝頑張らなくては〟と思って出かけました」。

時には、二人子供をかかえ、しんどそうにしている姿を見て、席を替わってくれる人や、京都駅の階段を英君の手をひいて連れて上がってくれる人々に、温かい心を

英君のお母さん

も何度も相談に行った上での入所だった。

保育所での二年間。「毎日午後には買い物に行って、品物はお金を払ってもらうもの、ゲームをしてルールは守らなくてはならないこと、会話の楽しさや近所の子供たちと遊ぶことなどを覚えました。英之にとって社会性を身につける時期だったと思います」。

仲間を追いかけ走り出す

英君六歳。いよいよ小学校だ。当時の校区の南小倉小学校には障害児学級がなかった。だから、みんなと一緒の普通学級にしようか、それとも校区外の障害児学級か。どちらが英君にとってよいのか両親は考えた。

先生との話し合いで、四十人の中の一人で何もわからないままただ座っているだけよりも、たとえ一つでもわかるように教えてもらえる校区外の小倉小学校の障害児学級を選んだ。

親は、送り迎えを希望したが、先生から「五年生の障害児学級の友だちもいる。また小学生としての自覚が必要だし、その力もきっとつく」と言われ、陰からそっと見守ることにした。

三年生。英君は校区の南小倉小学校に戻ってきた。校区の小学校に障害児学級が出来たのだ。

お母さんには一つの心配があった。それは集団登校。今までブラブラしながらの通学だった。それが集団登校にかわる。「みんなについてゆけるだろうか。一人だけ列からはみ出さないだろうか」。

母は、すぐ追いつくだろうと英君を走らせた。英君の家は高台にあり校門まで見通すことが出来る。英君はみんなと一緒に行かなくてはと一生懸命走ったが、追いつけず校門まで走り通した。

今まで人は人、自分は自分で集団に入ることは好まず、まして走るなどしんどいことはしない英君だったが、すでにこの時、集団の中の自分の位置をはっきり自覚していたのだ。仲間とともに行動することが英君にとって大事なことだったのだ。お母さんは泣いた。

両親や地域の人々の支えの中で

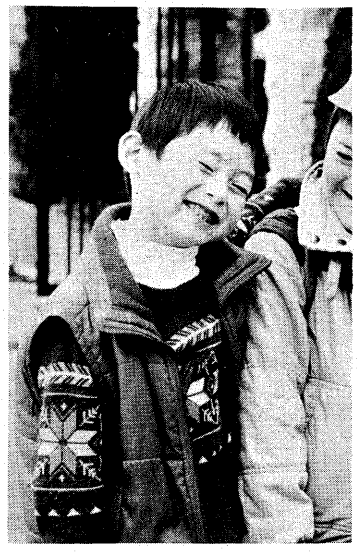
英君は今、四年生。四年生には四年生なりの真剣さが必要だと先生は考えている。普通学級や障害児学級など関係なく先生は同じ四年生として英君をみている。

二月十七日午後三時過ぎ、英君が学校から帰宅。先生と親との連絡帳。今日から英君が学校でのようすを自分で書くことになった。

二月十七日もく　雨
ぼくはゲームをしました。たいいくをしました。パンとぎゅうにゅうとおかずとふるうつぽんちをたべました。そうじをしました。たんぽぽのきょうしつへかえりました。

英君は今、友だちとの遊びにも夢中だが、家ではお父さんべったり。「わしの顔に〝ゲーム〟と書いたるのか」とお父さんがいうほどゲームに熱中する。お父さんも会社の催しには欠かさず英君を連れて行ったり、家族同士のレクリエーションにも積極的に参加。地域にとけ込む努力を続けてきた。

今、お母さんは英君に、布団の上げおろしを課している。「負担はかなり重いと思いますけど体力作りにと思って」。朝七時に起床す



下校途中の英君。友だち（左）と妹さん（右）と

らダウン症について説明を受けてから、お母さんが医師にたずねたことは「この子は結婚出来るのですか？」だった。「なぜそんなことを聞いたのかよく分からないけれど、今から思えば、普通の人生が送れるのですかと聞きたかったように思います」とお母さんは言う。

「今まで二年何カ月間、普通の子のように育て、障害を意識することもなかったから、またダウン症だからといって今までの英之と変わることはないし、これからど感じたのか英君が一番初めに言った言葉は「ありがとう」だった。

英君もお母さんも「どんぐり教室」が気に入り、雨の日でも通えるようにと住みなれた槇島から小倉へ引っ越した。母子通園での一年間で、「英之は人間で一番大切なことを知り得たと思います。それは人に感謝する心だ」と。

五十二年四月。英君が四歳の時、西小倉保育所に入所。地域に戻ってきた。「英君にとって、保育所での集団生活は絶対必要だと思っていた」母。福祉事務所や園長にしかし、余計な心配だった。

英君はちゃんと仲間について行った。今まで集団登校の列を横にふし目がちに数人の仲間と校区外に行っていた英君。お母さんはこの時、はじめて英君が集団登校の仲間に入りたかったことを知った。

「これまでとは、あいさつの声が違う。はりきっている。学校へ行くのをしぶっている時も、みんなが待ってるよと言えば動きだす」。

最近こんなことがあった。朝、英君がトイレに行っている間に、みんなが先に行ってしまったのだ。

る英君は妹と一緒にがんばって布団を上げている。

英君はあと二年で小学校も卒業だ。お母さんは英君の進路について考える。「英之はいろんな面で恵まれてきたとはいえ、障害を持たない子と比べてあまりにもいろんな問題があると思います。今のあたり前の生活を守ってやりたいと思います。養護学校にいけば地域から離れてしまう」英君にとって何が一番いいのかお母さんは迷う。お母さんは将来英君を就職させようと考えている。

地域社会の役割

私はこう思う…

障害者が安心して暮らせるために、地域社会が果たすべき役割とは、また、私たちがいかに考え行動すべきことは何なのかを考えてみたいものです。ここで、教育、療育、仕事などの問題を通じて6人の方からのご意見をご紹介します。

親から…　働く喜びを

青山冨美枝

私の子供は十八歳。重度の脳性マヒです。歩行はもちろん自分の力で座ることも出来ません。言葉による意思疎通も困難です。現在滋賀県下の重度身体障害者施設に入所しています。養護学校を卒業するまでは、友人や先生との関わりがもてましたが、その後は兄弟もいないので一人で家にいると子供も成長しないと思い施設入所を決意したのです。

今、子供にとってはいろいろな人と関わりを深めることが一番大事だと思います。また、手も足も不自由ですが時間さえ問題にしなければ仕事が出来ると思います。働く場、集まる場が地域に出来たとき、私は子供を家につれて帰ろうと思っています。地域で仲間とともに汗を流し、働く喜びを子供に教えたいからです。

療護施設を

安藤芳枝

今、重度障害児が養護学校を卒業した後の進路は、ほとんどの子は遠方の施設入所しか道がない状況です。障害をもつがゆえに肉親と別れて暮らさなければならないのです。私の子どもは今年中学部二年生になりますが、全面介助しなければならない重度障害児です。

今年、養護学校高等部を卒業した人が卒業式を待たず遠方の療護施設へ入所されました。三月の卒業式が済んでからでは定員が一杯になり入れなくなるからです。この現状を見ていますと、せめて親の手の届く範囲内に施設がほしいという願いにかりたてられじっとしていられない気持ちです。

五、六人の有志から始めた古紙回収も三年余り。宇治市にも療護施設がほしいという大きな願いをもってすすめています。子どもの年齢、障害の別を問わず親の輪がひろがっています。

「障害者」から　生きるために

浅井三千男

自分自身の歩んで来た人生の中で一番苦しんだのは、就職のことでした。養護学校を卒業する時点で希望する職種につけなかったのですが、それは自分の気持がしっかりしていなかったのと、やはり「障害」というどうしようもないものせいだと思います。

一般的に、障害者は能力面で健常者より低いという認識が強く、そのことで私は社会から拒まれました。そこで、まず自分自身の気持を固めていくことから始めました。悩み苦しみの日々…。その間アルバイト、ボランティア活動などで社会人としての知識などを身につける一方、求職活動を続けました。とにかく、自分に負けず、社会にも負けず現実を見つめてきました。その結果、私は今、重度身体障害者の授産施設の職員として働いています。

私が養護学校を卒業してから現在の職につくまでには、多くの人との関わりがありました。障害者だからといってただ受身で待つだけでは何も出来ないと思います。豊かな人間関係を作ることが生きることにつながると思います。

指導員・療育者から　就労と行政

村田昌志（共同作業所）

共同作業所からも何人かの仲間が企業に就職しています。しかし、言葉がうまく出ないためみんなの輪の中に入れなかったり、不況による影響から労働条件が悪くなっていったり、安心して働ける状況ではないのです。

理解のある企業の中で、職場の中で励まされながら精一杯働いている障害者や、自分自身の大変な努力で自立している人もいます。しかし、それは個人や民間の善意や努力にまかされたものではないでしょうか。

養護学校や訓練校、作業所などから社会へ出た後の、身体の状態、人間関係、仕事・生活での問題を公的な立場でしっかり把握し、バックアップしてほしいのです。医療や教育、労働、福祉等バラバラの縦わり行政ではなく、柔軟で豊かな対応を望みたいものです。

あせらずに

桑山治平（宇治福祉園）

A君は入園当初、遊戯室ではいるのかいないのかわからないほど存在感の乏しい子だった。いつも部屋の角にぽつんと座っており、私が手を出すとスーと逃げていって遊びへのきっかけがつかめない状態であった。五カ月目、A君のお母さんと療育中の経過について話をしている最中に、A君は私に向かって首を横に振ってブルブルといい出した。同じようにしてやると表情がパッと明るくなった。

療育の営みは息長く待つことである。こちらがあせっては何もならない。A君にはA君の歩調があろう。それにどう付き添いながら遊びを展開していくかにある。

今年は国際障害者年の三年目。真に人と人とのふれあいをもてるような、そのような人間関係を乳幼児の時期から真剣に育まなければならない時代でもある。

市民から…　ある「言葉」

森美登里（ボランティア）

数年前の出来事。共同作業所に通っているKさんと私は、福祉バザーのビラを街頭で配っている時に、ある人が「Kさんがビラを渡すと、受け取る人がこわがるからやめた方がいい」と言われました。日頃その人が福祉に関わっている人だけに、その言葉は私には大きなショックでした。今、考えてみると大部分の人の心にそのような部分があるのではないかと思います。その人の場合も多分意識しないところでその言葉が出たのではないかと思います。

私たちは自分たちの住む地域社会を住みよくしようと努力します。それは決して障害者を排除した上に成り立つものではないはずです。意識や環境面でともに生きてゆける社会が必要です。今、私に何が出来るかよく分かりませんが、そういう視点を大切にしたいのです。

障害者福祉都市の実現に向けて

歩道の改善など

＝57年度事業のまとめ＝

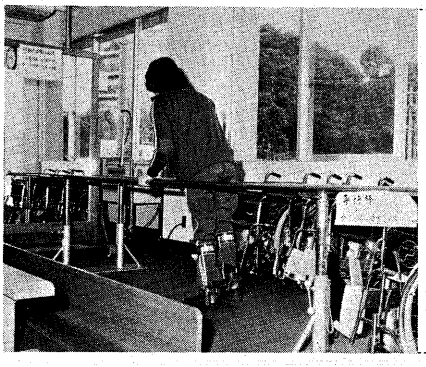
宇治市が、障害者福祉都市の指定を受けて約一年が過ぎました。

この間、市では障害者福祉都市推進協議会を設け、身体に障害をもつ人の住みよい町づくりをめざして、具体的な事業を総合的にすすめてきました。

まず、心身障害（児）者にとって不便であるばかりか、危険な個所を昨年十二月九日の「障害者の日」に点検し、改善しています。

また、在宅の障害者の社会参加を促進する障害者への福祉サービスの充実、障害の早期発見、早期療育への取り組み、障害者問題を市民一人ひとりが自分のものとしていただくための講座なども実施してきました。

録音室で練習するリーディングボランティア育成講習会の受講生（総合福祉会館で）



障害者福祉センターに設置した機能回復訓練機器

生活環境の改善

▷南宇治中学校に身体障害者用便所とスロープを設置。
▷木幡・小倉公民館の敷地を身体障害者が使いやすいように整備、専用駐車場を設置。
▷公共施設に車いすを配置。
▷御蔵山商店街の歩道にすべり止め舗装。
▷市道宇治橋若森線にガードレールを設置。
▷市道大久保名木線の歩道の段差を切り下げ。

障害者への福祉サービス

▷盲人用カナタイプライター指導者養成講習会、リーディングボランティア養成講習会を実施。
▷点字印刷器、カナタイプライター、点字ボードを購入。
▷電話ファクシミリ４台を設置。
▷宇治共同作業所に農耕作業所を開設。
▷身体障害者福祉センターに機能回復訓練機器、療育機器を購入。
▷障害者スポーツ・レクリエーション振興のための卓球台など運動機器を購入。

心身障害児の早期療育

▷心身障害児発達相談事業、早期療育指導教室の開設。
▷心身障害児サマースクールを実施。
▷神明小「きこえの教室」にビデオセット購入。
▷小学校に障害児用教材遊具を整備。

58年度の主な事業（案）は

〈生活環境改善事業〉
▷市庁舎玄関の自動ドア設置に500万円。
▷心身障害児（者）共同作業所の増改築に500万円。
▷道路の防護さくや歩道切り下げ工事に600万円。

〈障害者福祉サービス事業〉
▷点字地図や点字電話帳の作成などに40万円。
▷障害児通学バスポニー号の購入に400万円。
▷障害者スポーツ・レクリエーション関係に110万円。

〈心身障害児早期療育推進事業〉
▷発達相談事業に89万円。
▷早期療育指導教室に54万円。

〈市民啓発事業〉
▷福祉連続講座やボランティア育成講座に68万円。
▷福祉のしおり発行やふれあいの広場に160万円。

〈講座や講習会〉
▷ボランティア養成講座。
▷カナタイプライター指導者養成講習会
▷点訳奉仕者養成講習会。

福祉の手びきをご利用ください

目の不自由な人のため、「福祉のてびき」を作成しました。これは身体障害者手帳の交付を受けたことにより利用できる福祉施策などをカセットテープに収録したものです。ご希望の人にお渡しします。

▼対象…視力障害により身体障害者手帳の一・二級の交付を受けている人。
▼費用…無料。

◇

問い合わせ、申し込みは、福祉課障害福祉係（☎㉒３１４１）

編集後記

この特集号は、障害者が「地域で生きる」ことをテーマにしてきました。

障害者が地域で生きることを困難にしていることが多くあります。こうした現実の重みを、私たち一人ひとりが知ることこそが、大切なことなのではないでしょうか。

「共に育ち、共に学び、共に生きる」というあたり前のことができる社会こそ、本当の人間の社会なのだと思います。二年間の障害者福祉都市の指定期間だけでなく障害者問題は継続して取り組まなければならない課題です。